

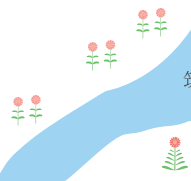
せん ごく じ だい げん だい わか かい せつ
戦国時代から現代まで解りやすく解説します!

まるわかり!大川の歴史

2015
Mana
Book

CLOSE UP!
OKAWA'S HISTORY
Japanorama Kyushu/Okawa

Okawa City Map



筑後川

大中島



筑後川
昇開橋



花宗川

風浪宮

442

大野島



大川中央公園



有明海沿岸道路

208



大川家具480年の歴史

おおかわ かぐ ふくおかけん おおかわ し しゅ かぐさんち いちだいきてん せいざん かぐ
大川家具とは、福岡県大川市を主とする家具生産の一大拠点で生産された家具です。

おおかわ し むつこう まち ねん れきし も かぐさんち にほんいちばんに
大川市は木工の街として480年の歴史を持ち、家具産地日本一を誇っています。

せんごくじだい ふんだいく きじゆつ い じしものづく おおかわ むつこう
戦国時代に船大工の技術を生かした指物作りから始まった大川の木工は

めいじいしん いこう たいしやう しょうわ べいせい じだいの なが あ
明治維新以降、大正、昭和、平成という時代の流れに合わせ

こんれい かぐ ちやうしん さまざま へんか ほつてん と
婚礼家具を中心に様々な変化、発展を遂げてきました。

うだ そと しょう つかつ だんどう ぎじゆつ いま いき
そこで生み出され、そして守り続けられた伝統の技術は今も息づいています。

せんじん ちやう ちやうしん おおかわ
先人たちが歩んできた歴史ドラマをたどってみましょう。

大川家具作りの はじまり

大川家具の生みの親、 榎津久米之介とは？



戦国時代に生まれた指物文化

大川家具の発祥は、戦国時代のまっただ中である1537年にさかのぼります。木工の祖・榎津久米之介が、家臣の生活のために指物を作らせたことが始まりと言われ、その中心地が榎津町の庄分であったことから、大川家具は昭和20年代まで、榎津指物または榎津モン(物)と呼ばれていました。

*木工の祖、榎津久米之介



1485年、室町幕府十二代将軍、足利義晴の家臣、榎津遠江守の弟として生まれる。兄の戦死後、戦乱の世を傳んで出家し、京都から大川に移り1536年に願蓮寺を建立した。1582年10月、96歳で死去。

*大川指物とは？

釘などを使わずに、木と木を組み合わせて作った調度品や建具のこと。机やタンス、箱などが代表的です。日本古来より伝わる非常に高い技術であり、現在の大川家具にもその伝統が息づいています。



大川の木工のはじまりは、榎津久米之介といわれています。



船大工の技術を生かして、これが「榎津指物」の起こりとされています。家具が主流になるにはまだ先です。

高度な 船大工の技術

榎津町が木工の町として発展した理由としては、元々、この地には船大工が多く住んでおり、高度な木工技術が受け継がれてきたことが挙げられます。また、日田で産出された木材が筑後川を通じて運ばれており、良質な木材が手に入りやすかったことも理由として考えられます。



小保の船大工の作業場

用語.1 船大工/木造船(和船、帆掛け舟、屋形船)の建造などを行う大工。船番匠とも言われる。

筑後一の港だった榎津庄分

多くの船が行き交う船大工の町

榎津町には、なぜ多くの船大工が住んでいたのでしょうか。その謎を解く鍵は、有明海と筑後川にあります。当時の物を運ぶ手段で主流だったのは船でした。全国各地の物資が有明海から船で運ばれ、さらに筑後川をさかのぼっていったのです。しかし、筑後川の水深は浅く、海上交通用の大船が航行できるのは榎津一帯まででした。そこで、積み荷を小舟に積み替え、上流にまで運んだのです。そのため榎津は、有明海と筑後川を航行する船が集中する筑後一の港として栄え、また、船の修理や、船造りをする船大工が必要となったのです。

資料によると、

- 1788(天明8)年、船大工67名、大工2名
- 1854(嘉永7)年、船大工101名、大工41名ほか

となり、大工職の多くが船大工であったことがわかります。

*日吉神社の船御輿

日吉神社の船御輿は、1774年に庄分の船大工たちが造り、奉納したと伝えられるもので、長さ9.2m、幅2m、高さ3m、杉材を使用し漆塗り。昭和38年に福岡県有形民俗文化財に指定されています。釘を一本も使わず、組み立て式になっており、当時の大工技術の高さがうかがえます。昭和40年代までは、毎年5月に船曳き祭りが開催されていましたが、現在は飾り付けをした船神輿の展示、公開という形で祭りを続けています。

船神輿の大きさは
長さ9.2m、幅2m、高さ3m、杉材を使用し漆塗り。



長崎市の榎津町では、日吉神社の船神輿と同じ型の船が保存されているそうです。



花宗川のことを、「榎津江湖」ともいってました。



海船は、積み荷を小舟に替え、上流の久留米の瀬下まで運んでいました。



榎津は有明海と筑後川を航行する船が集まっていたんだね。

若津港 若津港(手津屋蔵)

用語2 江湖 / 有明海の海水が流入している小河川や入江、花宗川(榎津江湖、川口地区三条野の江湖、三又地区新橋の江湖)など



関ヶ原の戦い



大川を翻弄した戦国時代、そして関ヶ原の合戦

せきがほら かつせん けいちよう わん がつ にち
関ヶ原の合戦 慶長5(1600)年9月15日、
 いした みつなり ひき せいこん とくがわ いえやす ひき どうぐん
石田三成が率いる西軍と徳川家康が率いる東軍が
 せきがほら いま きふ けん てんか わ め たたか
関ヶ原(今の岐阜県)で天下分け目の戦いをおこしました。

関ヶ原の火種が大川に

ちくご がわ か こう用語3 ちり てき じよう けん おおかわ し せん
 筑後川の河口という地理的条件から、大川市は戦
 国時代、大友宗麟、龍造寺隆信といった有力戦国大
 名みょうの勢力争いの舞台となりました。その後、1587年
 豊臣秀吉とよとみ ひでよしが九州を平定すると、立花宗茂たちばな むねしげの支配下
 となります。ところが、天下分け目の戦いと言われた
 関ヶ原の合戦で、立花氏は西軍に加担したことから改
 易えき用語4(領地没収)されることとなります。そして筑後一国
 36万石を支配する

ことになったのが、
 愛知県あいち けんの岡崎城主
 であった田中吉政
 でした。



田中吉政 肖像画

田中吉政の領国経営

たなか よしまさ せっきよく てき りようぐく けいえい なか かずかず ど ぼく
 田中吉政は積極的な領国経営の中で、数々の土木
 工事を行いました。慶長の本土居の改修工事のほか
 開拓事業にも精力的で、筑後入国後に道海島、瀉島、
 大野島の開拓を命じ、慶長の本土居完成後には堤防
 の外側に川口地区の紅粉屋、安本、小保の浜口を開
 拓しました。このことから、現在の大川市の骨格は田
 中吉政によって完成されたと言えます。

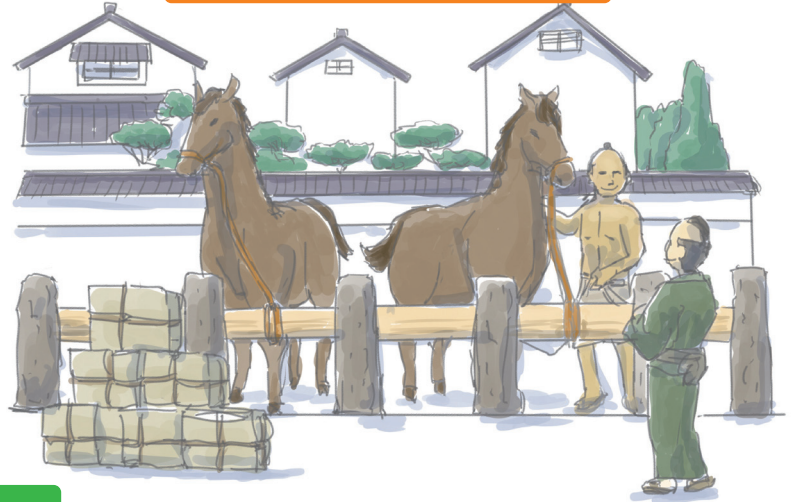
さらに、田中吉政が船大工を大事にしていたことが
 うかがえる資料もあります。榎津船大工の伝右衛門と
 いう人が所持していた文書がそれで、2名の船大工の
 所帯と家屋にかかる税を免除せよという内容です。ま
 た、これは1605年のもので「榎津船大工に関する」最
 も古い記録でもあります。

用語3 かこう かせん うみ みずうみ ほか すいいき そそ こ ぶぶん つな ちてん
 河口／河川が海や湖など他の水域へ注ぎ込む部分、繋がる地点のこと。

立花宗茂の復権と藩境の町

このように、大川発展の礎を築いた田中家ですが、跡継ぎがないことから取りつぶし(改易)となってしまう。その後、立花宗茂が再び柳川藩主となり、有馬豊氏が久留米藩、さらに立花宗茂の甥・高橋種次が三池藩主となりました。この筑後3藩の成立で大川市は、大川校区の小保町、川口校区と大野島校区全域、田口校区の幡保が柳川藩、それ以外が久留米藩という全国的にも珍しい藩境の町となりました。

馬継所にも利用され、馬10匹が小保と柳川を往來していました。



*ベタベタクヅコのはなし

榎津、小保地区は、江戸時代に久留米藩と柳川藩に分かれていた藩境の町です。今でも古い町並みが残る地域ですが、この両地区をつなぐ細い路地に「ベタベタクヅコ」という妖怪が出るという言い伝えが残っています。名前だけ聞くとユーモラスですが、子どもたちには大変怖がられていたそうです。姿形などもよく分かっていませんが、この言い伝えができた理由には、藩境の町特有の事情があったと考えられています。藩境とは今で言う国境のようなものですから、争いが絶えなかったと言います。そこで、そのような危険地帯に子どもたちが近づかないよう、怖い話を作って聞かせたのではないかと言うことです。妖怪話も歴史的な視点から見ると、また別のおもしろさが伝わってきますね。



*柳川領小保町と久留米領榎津町の御境石

小保町と榎津町の間にある御境石は、ここが柳川藩と久留米藩の境界線だった名残です。馬を乗り換える馬継所も兼ねており、石の中央の穴に丸太を通し、馬をつないでいました。

用語4 改易/律令制度では現職者の任を解き新任者を補任することを、鎌倉時代・室町時代には守護・地頭の職の変更を意味した。

筑後の農業を変えた水車の製造

九州有数の穀倉地帯、筑紫平野

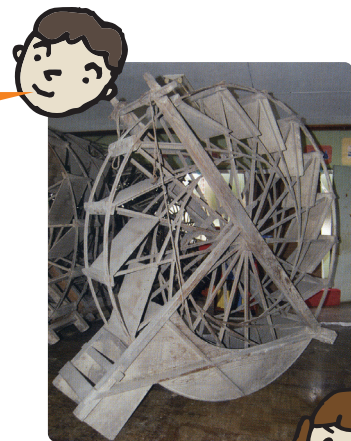
大川市を含む筑後地方から佐賀市周辺に広がる筑紫平野は、古くから九州有数の穀倉地帯でした。江戸時代の農業の中心は稲作で、米を育てるには大量の水が必要になります。そのため、筑紫平野には無数の堀がめぐらされているのですが、堀から水田へ水を入れるためには、打桶と呼ばれる桶でくみ上げるという大変な重労働が必要でした。



桶の口と底に左右各二本の縄をつけ、両方から縄を引っ張り、水田に水をくみ上げていました。

榎津の大工が筑後の農業を変えた

そこで考え出されたのが、当時大阪の淀川で使われていた水車でした。苦心の末完成した水車は、打桶の4倍もの量の水を水田に引き入れることができました。そして、その水車を製造したのが榎津の大工たちでした。元々船大工として高度な木工技術を持っていた榎津の大工が作る水車は性能が良く、大正時代末期に電気灌水機が登場するまで、榎津は水車の産地として栄えました。



水車



この足踏水車を使うと一日に二人で一町六反の田に水を入れることができました。打桶の約四倍です。



猪口石右衛門のより改良された水車。筑後の農家ではよく見られた光景です。



用語5 穀倉地帯／現在の日本で「穀倉地帯」と言うと、ほぼ米の穀倉地帯を指す。米の穀倉地帯は「米どころ」とも言われる。

船大工の町から指物の町へ

輸入されていた木工製品

江戸時代中期の1751年、久留米藩7代藩主・有馬頼僮は若津港を開港。次いで1774年には柳川藩が住吉に港を開き、大川は筑後川河口の水運の町となります。そのころ造船や水車を始めとした農具の生産で木工の町として栄えていた榎津ですが、家具生産はまだ本格的な産業とはなっていませんでした。記録にも家具類は大阪方面から輸入していたと残されています。それは、江戸時代は身分によって持ち物が制限され、現代のように好きなものを自由に買うことができなかったからです。そのため、榎津の大工たちも家具類は注文が入れば作るといった程度で、主な仕事にはなっていなかったのです。

*若津港を開いた有馬頼僮

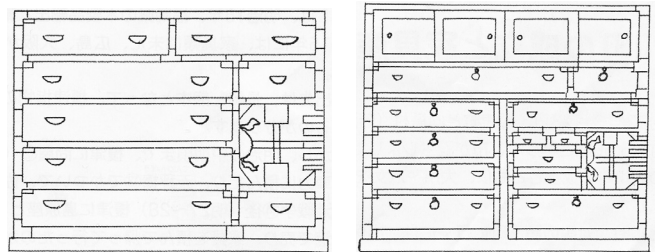
飢饉の時に救済金や救済米を施し、享保の改革の八代將軍徳川吉宗にならい目安箱を設置するなど、名君として名高い久留米藩7代藩主。頼僮が開いた若津港は久留米藩で最も重要な港となり、領内で採れた米は若津に集められ、大阪や江戸に運ばれていきました。今でもこの名君を偲び、毎年4月に「少将祭」が行われています。



有馬頼僮 肖像画

指物の産地へ

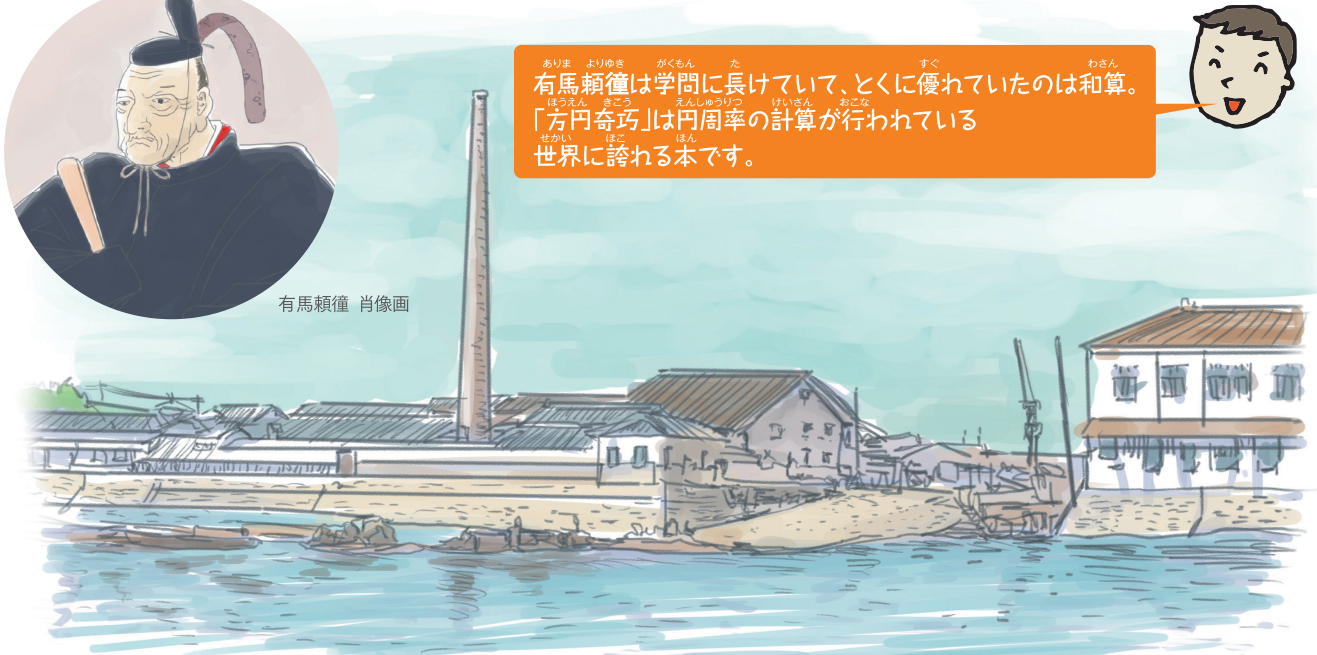
では、榎津の大工たちが指物製品を作るようになったのはいつ頃からでしょうか。記録によると、19世紀に入った文化年間から天保年間にかけて、柳川藩内や佐賀藩で榎津指物が販売されていたと記されています。榎津指物の中興の祖といわれる田ノ上嘉作も、この時代に活躍しました。



明治前期の榎津タンス(続大川風土記より)

*榎津指物中興の祖、田ノ上嘉作

文化9年(1812年)生まれ。大阪で指物の修行をした優秀な細工師が久留米にいと聞き、すぐに弟子入りし、箱物(物を入れる箱の家具類)の製作を修得。榎津に戻り指物製作を始めました。これが榎津指物のはじまりといわれています。その後榎津指物は、息子儀助、さらにその息子小平次に受け継がれ、さらなる発展を遂げます。



明治18年新設の若津渡船場(創業明治14年)

有馬頼僮は学問に長けていて、とくに優れていたのは和算。「方円奇巧」は円周率の計算が行われている世界に誇れる本です。



用語.6 目安箱 / 施政の参考意見や社会事情の収集などを目的に、庶民の進言の投書を集めるために設置した箱、及びその制度の事である。

地場産業への発展

明治維新と榎津町

明治4年、廃藩置県により柳川、久留米、三池の三藩はそれぞれ県になり、さらに統合されて三潴県となりました。明治15年と17年の史料によると、この頃の榎津の木工業は販路が長崎・熊本まで拡大しており、また、家具類が広島や大阪から輸入され続けていることが分かります。そして、水車は性能が優れていたようで、第2回内国勸業博覧会で榎津町の福山長右衛門さん製作の水車が入賞しています。

日清戦争後、榎津に島原座という買い寄せの店ができて、大草、島原方面から木炭農産物を積んで、若津港で売り、家具を積んで帰って行ったのが、榎津町の家具店のはじまりです。



榎津箆笥が生まれる

明治10年頃、大川独特のデザイン、機能を持った衣装ダンスが生産され始めました。非常に大型で、材質は杉・桐・樺を使い、素木・透漆・黒塗りなどで仕上げられているのが特徴です。また、金具には鉄・銅・真鍮などを使い、薄いタガネによる細かな透彫りを施すという手法も大川独特のものでした。当時、ひとつのダンスが完成するには、

1. 木挽ぎによる製材
2. 金具製造
3. 塗装技術
4. 木工職

という4つの高度な技術を持った異なる職人が必要で、その4つの技術の粋を集めた作品が「榎津箆笥」だったのでした。

大川町の誕生

家具産地となった大川町

明治22年、町村合併により大川町が誕生しました。オランダ人技術者、ヨハネス・デ・レーケの指導により筑後川の改修が行われ、若津港は外国航路の大型船も来航する港として発展していきました。町域の拡大と共に木工関係者が町全体の1/4を占めるようになり、大川町は家具の町として全国的に知られるようになります。この頃になると大川町にも家具店が誕生し、家具の取引がさらに盛んになっていきました。



現在も機能する若津港導流堤



明治政府は日本の近代化にあたって教育、医学、法律、土木などの専門家を欧米から雇い入れました。



*ヨハネス・デ・レーケ

日本の近代化のために明治政府が雇い入れたオランダ人技術者。日本土木事業に大きな影響を与え「砂防の父」と呼ばれました。オランダの技術を基礎としながら、日本の実情に合わせた事業を行い、今でも治水や利水の機能を果たしているものがたくさんあります。若津港導流堤もその1つで、現在でも若津港までの航路を確保する港湾施設として活躍しています。

用語.7 廃藩置県／明治維新期の明治4年7月14日(1871年8月29日)に、明治政府がそれまでの藩を廃止して地方統治を中央管下の府と県に一元化した行政改革である。

福博電車も大川で製造されました

※用語8

旧福博電車(西日本鉄道福岡市内電車)も大川の木工技術で製造へ

明治末から大正にかけて大川町には深川造船所という近代工場があり大川の指物の技術や船大工の技術を活用し木造蒸気船(900総トン)や鉄道車両が製造され、九州一円に若津港から出荷されました。

また、当時の三潞軌道には羽犬塚線と柳川線、大川鉄道には久留米線(大善寺)があり、若津港と鉄道の九州有数の物流の拠点でした。



木骨・木造の福博電車



木造蒸気船の若津丸

*三潞軌道の開通

明治24(1891)年、久留米-若津間の九州鉄道の線路が羽犬塚を通る線に移行し、明治38(1905)年の長崎本線の開通で、若津の港湾機能は次第に低下していきました。

若津港の斜陽化に対し、明治36(1903)年に南筑馬車軌道株式会社が創立され、明治40(1907)年に深川文十ほか数名が計画して三潞軌道株式会社を創立しました。

明治42(1909)年、中原一羽犬塚駅の軌道(道路に鉄道を敷いたもの)が開通し、福島地方の主要物産が羽犬塚駅より九州鉄道によって輸送されるようになると、若津港は、相当の影響を受けるようになりました。

その後、大正3(1914)年、若津-柳川間に三潞鉄道の支線が開通して旅客や貨物を運びました。東町には、機関庫があり、若津-羽犬塚線と支線の分岐点になっていました。

主に大川の建具などを貨車に積み込んで、羽犬塚駅まで輸送していましたが、家具などは車力に積み、羽犬塚駅まで運んでいました。

三潞軌道は、小型の機関車が小型の客車や貨物を一両か二両引張って走り、若者だったら、自転車について行けるほどの速力でした。



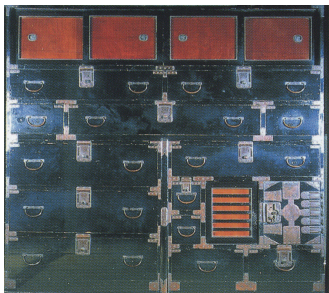
大正時代の太川鉄道 若津~久留米
大正10年櫻津まで延長

用語8 福博電車 / かつて福岡県福岡市において路面電車を運営していた事業者である。

榎津指物から大川家具へ

工業講習所の設立で技術が向上

榎津指物が大川指物と呼び名が変わったのは、明治43年に大川指物同業組合が結成されてからです。この時に木工技術を高めるために工業講習所を設立し、桐箆笥の産地として有名な埼玉県の川越から指導者を迎えました。その努力が実を結び、タンスの金具、塗りが一段と向上し、花鳥風月の絵画風の螺鈿を取り入れるなどデザイン性も向上。大川指物は全盛期を迎えます。また、同じ時期、長崎本線の開通や三池港の開港により大量輸送が可能となり、販路も西九州一帯や関西方面へと拡大していきました。

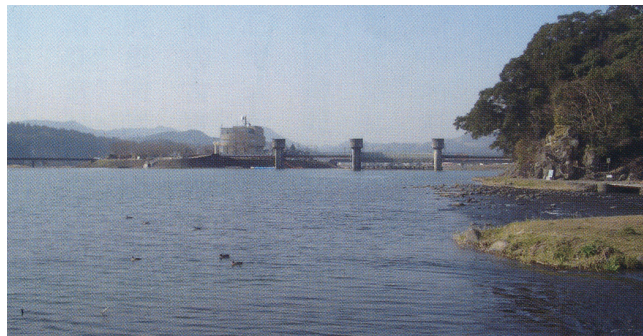


全盛期の榎津指物タンス

*日田からの筏流し

家具や木工製品の材料となる木材は、主に日田から運ばれていました。運搬方法は筏流しと呼ばれるもので、大分の玖珠や熊本の小国から切り出した材木で筏を組み、筑後川を下っていったのです。筏流しが始まったのは江戸時代前期頃からと言われていますが、盛んになったのは明治以降で、夜明ダムの工事が始まる昭和27年まで続きました。

日田から運ばれた木材は、木工製品の材料としてだけでなく、材木商を通じて佐賀・柳川方面へ販売されました。大川と日田は、筑後川を通じて二人三脚で発展していったのです。日田の亀山公園にある日隈神社には、明治43年に造られた古い玉垣が残っていますが、110本の内46本は大川の木材業者が奉納したものです。日田から受けていた恩恵に対する感謝の印と言えるでしょう。



亀山公園付近の筑後川



筑後川のほぼ半分70キロメートルを日田から大川の地まで3泊4日で、木材をいかだに組み、下流へ流し、筑後川から花宗江湖へ引き入れ、川辺の製材所に送り込んだそうです。



日田からの筏流し

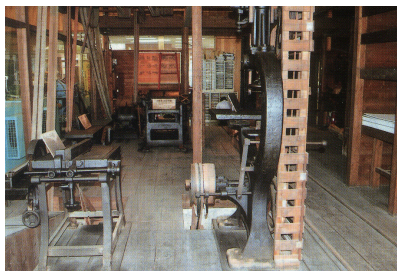
用語9 螺鈿／おうむ貝、夜光貝、あわびなどの真珠光を発する部分を取って薄い片にし種々の形に切って漆器あるいは木地にはめ込み飾りとした。

機械化の導入のはじまり

製材所の設立

大川にできた最初の製材所は、若津弥生町の山口製材所です。そして、大川の木工業で初めて機械を取り入れたのも、この製材所でした。電動と蒸気力で動く丸鋸で、これにより、材料の生産力が飛躍的に上がったのは言うまでもありません。それ以前は、木挽と呼ばれる職人が、縦挽き用の大きなのこぎりを手で引いて、木材を割っていたのです。

大正10年には製材所は5つに増えましたが、これらは花宗川のそばにありました。それは、日田から筏流しで運ばれてくる木材を保管しておく貯木場として、花宗川の河川敷が利用できたからです。



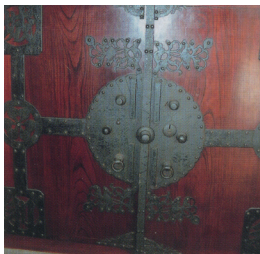
榎津長町松本タンス店
大正10年代設置された
木工機械

家具作りは手作業が主流

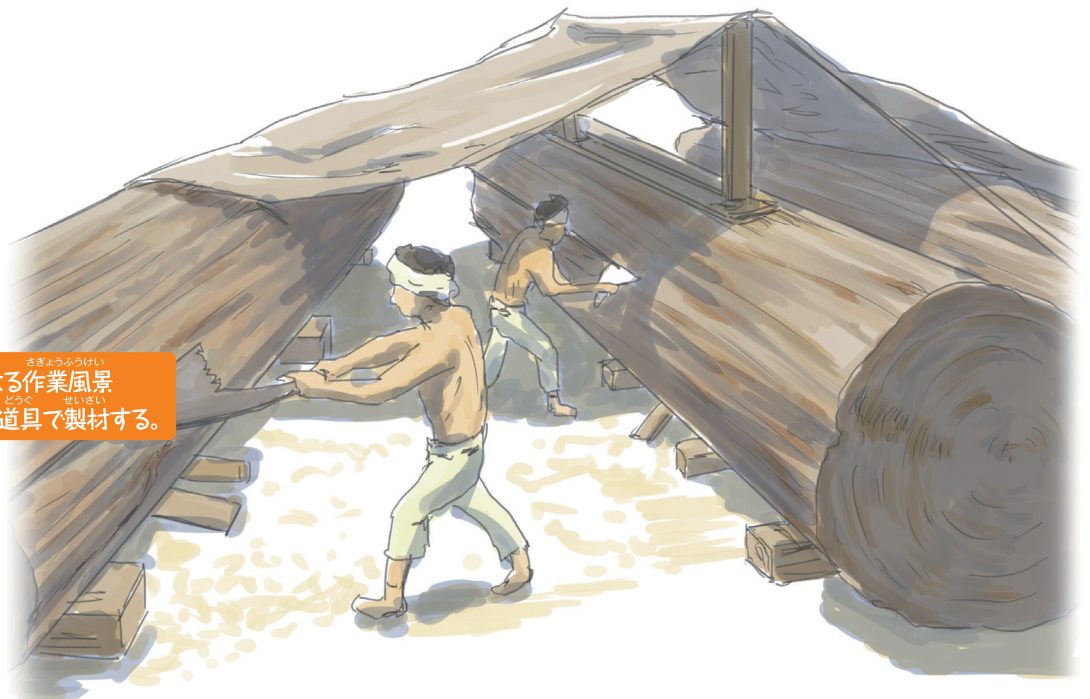
家具を作る指物業で初めて機械を導入したのは、榎津町の松本由太郎という人でした。丸鋸、帯鋸、カッター、手押し鉋、自動角のみといった機械で、大正11年のことです。それらは現在、向島の村上機械に展示されています。

しかし、木工所での機械化はあまり広がらず、導入したのは当時わずか2~3の工場だけでした。なぜなら、当時の家具製造は1. 木挽による製材、2. 白木製造(塗装していない状態で家具を造る)、3. 塗装仕上げ、4. 金具製造という4つの手作業に分けられ、別々の職人たちがそれぞれの小規模な工場で行っていたからです。これを異種的手工業と言います。

なお、この時期には大正12年の関東大震災の復興需要により、東京風のダンスを造る機会が多くなりましたが、そのため榎津独特のデザインの特徴がなくなり、産地の名称であった榎津の名がだんだん使用されなくなりました。



明治期の榎津タンスの金具
金具職の手作業により作成



木挽職による作業風景
大鋸という道具で製材する。

木挽職による作業風景

用語10 木挽 / 木材を「大鋸」を使用して挽き切ること、およびそれを職業とする者である。

世界恐慌、そして戦後へ

世界的な大不況

西九州から関西地方まで販路を広げた大川家具で
 したが、昭和4年に始まる世界恐慌という世界的な大不
 況の影響を受け、生産高は約半分まで落ち込みました。
 当時、全国的には4人に1人が失業者と言われていまし
 ましたが、手に職を持つ大川の木工職の人たちは農村に水
 車を作りに行ったり、当時行われていた国鉄佐賀線の工
 事に参加したりして、不況を乗り切りました。

戦争の影

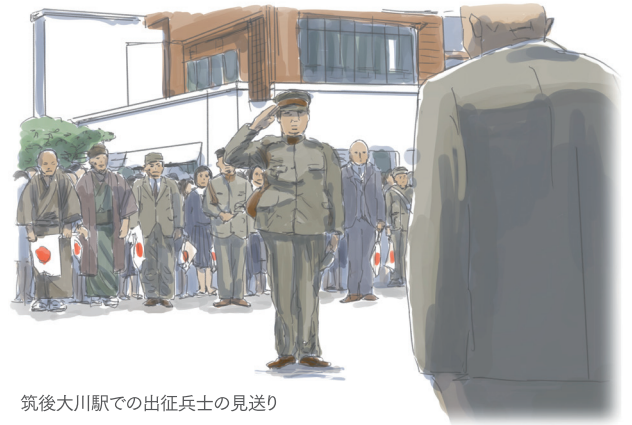
佐賀線が開通し筑後大川駅ができると、大川に日本
 通運株式会社が進出し、家具生産もさらに盛んになっ
 ていきました。しかし、昭和12年に日中戦争、昭和16年に
 太平洋戦争が始まると様子は一変します。戦争目的の
 ためあらゆる品が国に管理され、家具の材料である木
 材も自由に手に入らなくなり、若い職人たちは戦地へと
 出兵していきました。また、木工所も軍需品を製造する軍
 需工場になってしまったのです。

*筑後川昇開橋



国の重要文化財にも
 指定されている筑後川昇
 開橋は、昭和10年に開通
 した国鉄佐賀線の一部
 だったものです。大川と諸
 富を結ぶ全長507.2mの
 鉄橋で、橋の下を大型船

が通るときは、橋の中央部を23mの高さまで持ち上げる仕組みに
 なっています。現存する可動式鉄橋では全国で最も古く、現在は遊
 歩道として歩いて渡ることができます。



筑後大川駅での出征兵士の見送り



筑後川昇開橋

用語.11 世界恐慌／世界的規模で起きる経済恐慌である。ある国の恐慌が次々と他国へと波及し、世界的規模で広がる事象。

大量生産を可能にした新技術

全国から注文が来るようになると、それに対応するために大量生産が必要になってきます。その大量生産を可能にしたのが、フラッシュ構造とダボ工法です。フラッシュ構造とは、角材などの芯を格子に組み、その上に合板を貼り付けた板で、1本の材木を無駄なく使える上、軽いという特徴を持っています。また、ダボ工法とは、板と板を組み合わせるための技術で、両方に穴を開け、その中にダボと呼ばれる丸い棒を差し込み接着剤でくっつけます。これらの技術を取り入れることで、大川では早く安価な家具が作れるようになりました。



人に優しい、環境に優しい快適なインテリア空間の創造

ベビーブーム世代の婚礼の急増

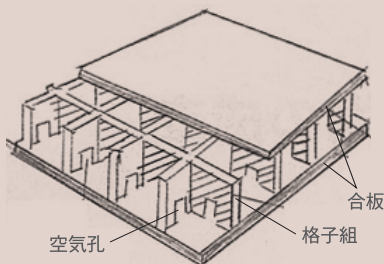
昭和35年から40年代にかけて、住宅新築の激増と戦後のベビーブーム世代の婚礼の急増で、家具は爆発的に売れました。今では、家具工場にはコンピュータを使った機械も使われるようになり、家具生産はオートメーション化されていきます。

「つくれば売れる時代」から
「売れるものをつくる時代」へ
変わってきました。

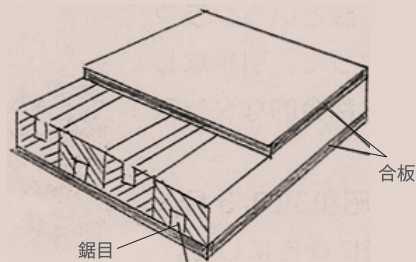


このようにデザイン面でも技術面でも飛躍的な成長を遂げた大川家具は、ベビーブームによる結婚や新築ラッシュにより婚礼家具として人気が高まり、順調に生産を伸ばしていきます。昭和46年には全国的にも最大級の大川産業会館が落成し、昭和54年になると生産額1千億円を超える、日本一の家具の町になったのでした。

フレームコアフラッシュパネル



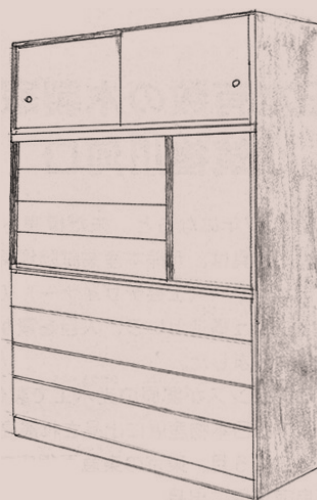
ランバーコアフラッシュパネル



(昭和50年九州経済白書より作図)

フラッシュ構造 引き手なし家具

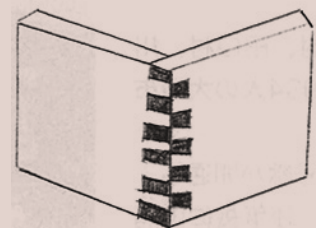
河内 諒 設計



フラッシュ構造

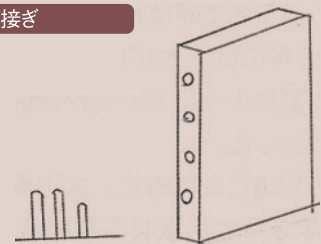
枠心を組んでこの表、ウラに単板を張って平らな板面になっている構造

蟻組接ぎ



先端が広がって鳩の尾のようにになっているものを蟻といいます。ダブルという機械で作成します。

ダボ接ぎ



5~8ミリの丸棒をダボといいいます。強力な接着剤をつけ、板の穴に差し込み作成します。

用語.14 ベビーブーム／主に特定の地域で一時的に新生児出生率が急上昇する現象である。

大川の伝統工芸品 Okawa Traditional crafts

現在、大川の木工製品の多くは、機械化された工場で大規模生産されています。しかし、伝統工芸品も数多く残っており、高度な技術を持つ職人たちが伝統の技法を守り、受け継いでいます。その中でも大川総桐タンス、大川彫刻、大川組子、掛川、柳川神棚は、福岡県特産工芸品に指定されています。

大川総桐タンス

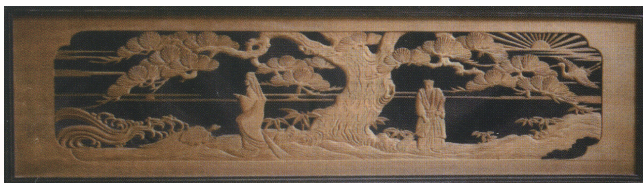
桐は湿気と呼ばない、燃えにくい、木目がきれいという特徴があり、高級タンスの素材として古くから愛されてきました。大川の総桐タンスは、外面も内面もすべて桐を使っており、桐タンスの中でも最高級品とされています。



大川総桐タンス

大川彫刻 昭和61年指定

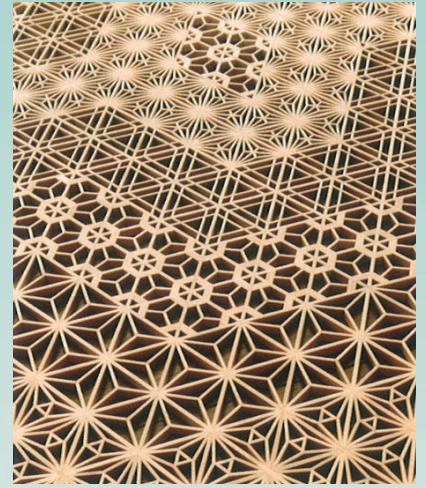
大川彫刻の代表的なものは、住宅の欄間です。繊細なタッチの透し彫りや、立体的に彫り出した彫刻欄間など高い技術が必要で、筑後地方の神社やお寺、上級武士、大町人の屋敷の欄間などは、榎津や小保の職人が手がけてきました。旧吉原家住宅で江戸期に作られた彫刻欄間を見ることができます。



「書院欄間 高砂」(明治中期 作/黒田多吉)

大川組子 昭和62年指定

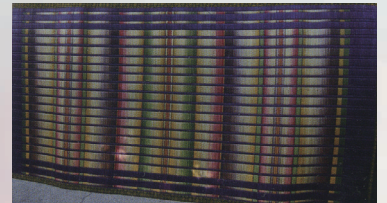
組子とは、釘を使わずに木と木を組み付けて作る建具の技法のひとつ。建具職人が腕を競う中、建具の装飾として誕生しました。図柄のパターンは200種類以上にもおよび、現在もこれらを活用して職人が独自に新しい図柄を生み出しています。薄く細かな木のパーツを組み込んだ複雑なデザインは、見る方向や光によって表情が変わり、まるで万華鏡のような美しさを持っています。



大川組子

掛川 昭和54年指定

様々な染色したい草で織った美しい敷物で、筑後花ゴザの中でも最高級品です。盆ゴザ、御前ゴザとも呼ばれています。筑後地方では仏前で使われるほか、応接間の敷物としても使われています。昔は高度な技術が必要な手織りでしたが、現在はほとんどが機械織りになっています。



掛川織

柳川神棚 昭和56年指定

昔は榎津の長町で製造されていましたが、製造地が柳川に移ったことで柳川神棚の名前が使われています。神棚には伊勢型、出雲型、太宰府型の3種類がありますが、柳川神棚は全国でも珍しい太宰府型です。



柳川神棚